ぐるころ、兩僧歸路半里ばかりにて、金鼓のこゑ起るを聞きおどろきしが、是れ光秀が謀反して攻め來たり、本能寺を圍むにてぞ有ける、翌二日同所にて信長公御生害なり、後に圍碁のことを思ひ出だして、前兆といふこともあるもの哉と、衆皆々云ひあへりといふ、またその時の碁譜成とてつたへたり、此の碁をおもひ見るに、利玄が隅の石をとらるゝを見損じたる本因坊が、布置手配の樣子、是亦前兆ともいふべき歟、

〔鹽尻三十九〕いつの年なりけん、本因坊、死に臨みて口吟せし歌とて人見す、自家の業に合せて、いと面白し、

碁ならばやかうにもたてゝ生べきを死ぬる道には手一つもなし

〔書言字考節用集九言辭〕征點（シテウナカテ）圍碁所言　止長（シチヤウ）同上

〔倭訓栞中編志〕ゑちやう○中略　圍碁にいふは四張の義にや、征字を譯せり、

〔圍碁式〕先手事

先の手をば中聖目に打入べくやとおぼゆ、其故は中に打つれば、かさをうたる、中の池をとられず四丁不ㇾ被ㇾ懸、

〔守武千句〕姉何

あづま路のはてとおもへど碁を打て　四てうにかくる佐野の船はし

〔倭訓栞前編波二十四〕はま。略○中　碁に濱といふも、濱の眞砂の意にとるなるべし、

〔拾遺和歌集九雜〕天曆御時○村上　一條攝政○藤原伊尹　藏人頭にて侍けるに、おびをかけて御ごあそばしける、まけたてまつりて、御かずおほくなり侍ければ、おびを返し給ふとて、　御製

ゑら浪のうちやかへすとまつほどにはまのまさごの數ぞつもれる

〔倭訓栞中編多十三〕だめ。　碁にいへり、むだめの略にや、徒目など書り、或は儺目と書り、方相氏の四